

---

# ジグソーパズル

H I R O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジグソーパズル

### 【著者名】

HIRO

### 【あらすじ】

どれだけ自分に正直でいられるだろうか。やり直せる事、やり直せないこと…その境界線は？それは、正直さでだいぶ左右されるようだ。そんな事を考えさせてくれる1つの実話がここにある。

## (前書き)

世の中にたくさんあるストーリーの一つです。これは、実話を元に書かれていますが、一部仮名を使用しています。

壁には、大きなひまわりとそのバックに広がる壮大な海が鮮やかなジグソーパズルが飾つてある。

真っ白な壁のせいか、そのパズルが凄く目立つていた。

僕と亜矢が付き合い始めて三年が経とうとしている。一人で作ったパズル…付き合い始めてまるで一人の関係を作るよう二人で作ったものだ。今そのパズルは、こうなつてしまつた一人をどう傍観しているのだろうか…荷造りをしている亜矢をしり目に僕は、玄関で荷物を運び出している男が気になつていた。新しい亜矢の彼氏だ…一樹というらしいが、聞きたくもない。未練がある訳でもないがいきもしないのは、事実だ。その時

「ガチャンッ！」

と亜矢のほうから音が激しく聞こえた。振り返るとパズルがグチャグチャに床に落ちていた。壁から外そうとした勢いで、落ちてしまつたのだ。僕らの関係もこうなつてしまつたんだと、実感した一瞬だつた。

玄関では、一樹がソファーアームを運び出そうとしているが、重たいらしく苦戦していた。僕は、何気なくソファーアームの端を持った。パズルから逃げるかのように。「あつ、ありがとうございます。」

「いや、早く引っ越しを終わらせたいし。」

そう僕が言うと一樹は、すまなそうな顔をしてうつむいた。トラックの荷台に乗せ終わると、一樹が尋ねてきた。

「平気なんですか？」

「何が？」

「別れた彼女の今彼が引っ越しの手伝いに来て、さらに手伝わせられてる…僕なら殴つちゃうと思います。」

僕は、呆気にとられた。殴る…殴る…？何分、何秒？流れたのだろうか。僕は、頭より先に口が動いた。

「もう、終わったから…今は、何よりも早く引っ越しが終わってほしいよ。」

そう言つと一樹は、苦笑いを含みながら部屋に戻つて行つた。

僕は、部屋に戻る氣も失せ細い路地を歩き出した。なぜだろう? 一樹に言われた途端に不思議な感情に襲われた。思い出が走馬灯のように頭をよぎり始めた。ジグソーパズルを持つて一人で帰つた路地。その時は、つましく手をつなぎ笑顔がたくさんあつた。もう、一度崩れてしまつたパズルは、戻らない。そう思いながら…しばらく歩くとコインランドリーが見えてきた。ここにもよく一人で通つた。洗濯が終わるまで一人でたくさん話しこそした。僕は、コインランドリーのイスに座り心を落ち着かせた。なぜこうなつてしまつたのだろう? いつからだろう? それになぜ今こんなことを思つているのだろう? 静かな時間が流れた。

道を通る車の音も近所のおばちゃんの話し声も何も聞こえなくなり、聞こえるのは、自分の心の音だけになつた。ふつと我に返るといつのまにか夕日が沈みかけていた。僕は、勢いよくコインランドリーを飛び出すと家に向かい走り出した。走つている時に何を考えていたのだろう? 思い出せるのは、亜矢を失いたくない気持ちがしつかりあつたという事だ。心臓がバクバクと音を立て口からは、空気がもの凄い勢いで出入りしている。苦しくて、苦しくて、足がもつれた。でも、止まれなかつた。

「亜矢に言わなきや、亜矢に伝えなきや!」

家の前に着くと、トラックがなくなつていた。僕は、息を切らせながら辺りを見回すと大通りに出る門をトラックがちょうど曲がろうとするところだつた。自然と足がそのトラックを追つた! 大通りに出て行くトラックを歩道から追いかけたが差は、どんどん広がつて行つた。僕は、歩道橋に駆け上がり、大きな声をあげた。「亜矢…ごめんなー、お前が必要だー、俺が悪かつた戻つてこーい…パズル作り…直そう…。」

聞こえるはずもなかつた。もうトラックは、見えなくなつていた。

きっと亜矢は、気づきもしなかったんだろう。僕は、うなだれて歩道橋の上に座り込んだ。後悔をしている。涙が夕日に光り、静かに落ちた。それから何時間たつたのだろうか…いつのまにか月が見えていた。僕は、家路についた。その足取りは、重く淋しい音だった。家に着き、玄関をはいると真っ暗だった。僕の心のように…月明かりが窓から入り部屋の壁を照らしていた。床まで続いていた光を追うとそこには、亜矢の後ろ姿があつた。亜矢は、泣きながらパズルを直していた。僕は、混乱して立ち尽くしていた。

「なつなんで?どう、して?」

声にもなつていなかつた。ゆっくり亜矢がこちらを振り向き口を開いた。

「無理じゃないよね?パズル…直るよね?私たちみたいに。」

か細い声だつた。今にも途切れてしまいそうな声に僕は、涙した。

「ああ、直そう。もう一度。一人で…。」

重なつた二人の影を月が照らしていた。

ジグソーパズル…何度もそれは、元に戻せるものだ。崩れたらまた、二人で作ればいい。恋は、ジグソーパズルのようなものなのだから。

(後書き)

必ずしもハッピーエンドで終わらないストーリーもたくさんあると思います。このストーリーは、たまたまハッピーエンドだっただけです。次回も楽しみにしてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7669a/>

---

ジグソーパズル

2011年1月27日04時00分発行